

ブルキナファソの土の家_1

2011/8/30～9/11

2011年8～9月と2012年10～11月、科研「土による環境造形」で西アフリカのブルキナファソを訪れた。2011年はリサーチ、2012年は現地日本大使館の招聘により、首都ワガドゥグで開催された国際工芸見本市 Salon International de l'Artisanat de Ouagadougou (SIAO)に参加した。

ブルキナファソのつちのいえは、素材・技術・形・構造・機能がじつに多様だった。



ボボ・ディウラソ Bobo-Dioulasso の白いモスク



2011/9/2



首都ワガドゥグからバスで1号線を約360km、ブルキナファソ第2の都ボボディウラソに白いモスクがある。

西アフリカのモスク特有のスーダン様式で、日干しレンガ積みだが、外壁の白い漆喰仕上げが特異だ。先の尖った分厚い控え壁が列柱状に林立し、椰子の木がトゲ状に突き出る外観が印象的である。これらはテロンterronと呼ばれ、壁のひび割れを防ぐと共に補修の際の足場になり、装飾的效果ももたらしている。内部は外と同様に漆喰を塗った厚さ1mほどの構造壁で、廊下状の狭い空間が交差し、中東のモスクのような集団礼拝用の大広間がない。生木の木組み天井もアフリカ



屋上。角錐のミナレット（尖塔）は二つあった。

的で、天窓から自然光が入る。

この場所のはかつて土着のアニミズムの宗教施設があった。モスクの建造は1880年とされるが、1998年にサッカー・アフリカ杯がブルキナファソで行われた際に改修されている。





大地も道も家も同じ土でできたような旧市街。



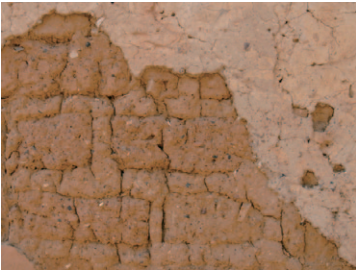
「シア村の先祖の最初の家、11世紀建立」とある。



「SYA-KOUROU：ポボ・マダレの始祖の家と祭壇」



始祖の家の中庭の祭壇。生け糞の鶏の血や羽根がこびりついている。土着信仰の呪術性を感じる。



日干しレンガを縦・横交互に積んでいるが、ツナギになる粘土層が分厚い。表面に牛糞をまぜた土を塗り重ねているが、漆喰ほど強度がなく剥がれ落ちている。土にワラなどを混ぜてつくる日干しレンガやそれを積む工法をBancoというが、ガイドによれば、この地区には専門の土工はおらず、「みな自分の家は自分でつくる」。だから同じ土を使っても、建物の形状や風情はそれぞれ異なり、多様性に富んだ景観を生む。



剥落と塗り重ねが交錯する壁のマチエールが美しい。旧市街の家はほとんど陸屋根。



左：鍛冶屋の工房。サハラ以南は文明史の常識とは逆にブロンズの使用は鉄よりあとになる。ブルキナは西アフリカで最もブロンズ彫刻がさかんだ。

右：別のブロンズ細工師の工房。絵も描く明るい青年で仲よくなった。壁画の赤はラテライトの赤土、白はカオリン、みな大地から採ったという。

ロビとガンの土の家 (ガワGaoua)

ボボ・ディウラソから南西部の中心地ガワ Gaouaへ四駆で長距離移動。

ガワの丘の上に川の名を冠したボニ博物館がある。1961年以来この地に住み、ロビの文化研究に生涯を捧げたフランス人人類学者マドレーヌ・ペールが集めた民具や古い写真資料が系統的に展示され、ロビ民族文化博物館とも言える。庭には、ロビ族とガン族の家が原寸大で忠実に再現されている。

ロビ Lobiとは、昔、ガーナから移住してきたロビ、ピリフ、ダガン、ブゴリ、ジャンなど7種族の総称。

中央集権を嫌う女系社会で、一家族ごとに塙なしの一つの独立要塞のような家に住む。男は弓矢にすぐれ、各家は「矢が届かない距離」に互いに離れて建てる。自衛のため窓はごく小さく、内部は迷路状の部屋に分れる。

戦いのときに立てこもりできるよう、普通は外につくる穀物庫が玄関ホールの真ん中にある。その左右に道具や家禽・家畜用の部屋がある。奥に第一夫人と第二夫人の部屋が配され、隣接して祭壇や料理用の炉がある。

壁は下から土塊を積みあげ、牛糞をまぜた土を塗って仕上げている。1回の作業で積み上げる高さは約40cm。固まったらその上にまた積み上げる。それを5～6回繰り返すので、5～6層の水平の帯ができる。自重を支えるため下の方が分厚い。作業プロセスがそのまま外観になって現れていて、興味深い。

ガワの近辺に実際のロビ族の集落があるが、訪れる時間はなかった。



ガワへの道。道は未舗装、雨期も重なり難路だった。



植民地時代の建物を転用したボニ博物館(1990開館)



ロビの家



中は薄暗く迷路状。木の柱が梁を支え、壁と柱の二重構造で頑強である。天窓から明かりをとる。



第一夫人の部屋の傍らに祭壇室があり、呪物が祀られている。横に屋上テラスに上る梯子がある。



積み重ねられた陶器は、宝具や装身具など貴重品を入れておく筆筒でもある。家の中心的な調度品であり、豊かさの象徴。つくるのも管理するのも女性。



テラスには部屋の壁が突き出ている、部屋の配置がそのまま反映されている。主が使う小部屋が見張り小屋風に突き出している。編笠の下は穀物庫である。

ガンの家



別のタイプのガンの家。茅葺きが薄い。



ガンの家とその側面（写真下）。側面はラテライトの石を積み上げ、上塗りはしていない。



内壁の壁画装飾が美しい。壁と一体化した棚は、土壁ならではの自由な造形から生まれている。

ロビの一種族である**ガンGanの家**は、家族全員が一つの家に集まって暮らす他のロビ族と対照的に、家族構成員それぞれが独立した小屋Caseをもち、それらと穀物庫が集まって構成される。壁の工法もロビとは異なり、日干レンガを粘土でつなぎながら積んでいく。小屋によってレンガの大きさや仕上げ方がちがう。

小屋にはそれぞれ円屋根がのる。日本とちがって、雨が少ない土地だから、屋根は薄い。屋根は、地面の上で葺いてから、みなで持ち上げて小屋にのせるという。雨の多い日本の分厚く重い屋根では不可能だ。



寝床は床から少し上がり、回りの壁に簡素でユニークな装飾が施されている。



円錐屋根の垂木を交わせるやり方が興味深い。



ガンの家
(オビレ Obiré)

広場と集会所
外来者の応接もここで行う

ガワから約50km西にガン族が昔からの習俗のまま暮らしている村オビレがある。他のロビ族とちがい、親族をまとめる「王」がいる父系社会で、村に入るには王への謁見が必要。会ってみると30代の若い王だった。

ガン族は、一定の土地に王と妻たち、祖父母、兄弟姉妹、子供たちが複数の小屋に分かれて住む。男と女は別に住み、男の住居は四角で、女のは丸い。小屋群は中庭を取り囲むように配され、周辺に穀物庫や家畜小屋がある。

村から少し離れた所に歴代の王の墓所がある。十数基の石積み墓室がコの字に並び、各々に宝貝の目と首飾りをつけた土の塑像が一体ずつ祀られる。大地に腰を下ろした王たちの姿は、とても原始的で神秘的だった。



一番奥にある女の小屋。外壁には牛糞を混ぜた土が塗られている。薄い茅葺き屋根。長い庇と小壁が魅力的な入口空間をつくっている。



丸い女の小屋。屋根飾りが特徴的。日干レンガを長手方向にそろえて規則正しく積んでいる。



集会所脇の王の四角い小屋とその細部。日干レンガ積みで、正面壁は別の土を上塗り。折畳み椅子や長靴、一輪車など、近代生活が入り込んでいるようだ。



分厚い塗り土のひび割れパターンが美しい。基礎に使われたラテライトの石が回りに転がっている。



【上】穀物庫の形はどれもユニーク。高い位置に窓のような入口を設け、壁にレリーフを施したものもある。【右】歴代の王の墓室と内部の土の塑像



ロロペニ遺跡 Ruines de Loropéni

オビレ村から約10km南東にブルキナファソ初の世界遺産「ロロペニ遺跡」がある。



敷地は一辺約105mのほぼ正方形で、ラテライトの石を積み上げた高さ6m近い城壁に囲まれている。内部を分割する壁も東西南北方向に規則正しい。壁の厚みは下部が約1.4m、上端は30cmほどである。

全盛期は14～17世紀だが、起源は11世紀、さらにワガドゥグ大学のラシナ・サンボレ教授によれば、8世紀に遡る。つまり、ヨーロッパ人が来るはるか以前、地域の固有資源と技術のみで高度で大規模な空間秩序を実現しているのだ。同じく11世紀建造とされるアフリカの世界遺産に「グレート・ジンバブエ遺跡」があるが、楕円形であり、直方体の花崗岩の石積みである点がロロペニと決定的に異なる。

ロロペニの巨大要塞は、金を主としたサハラ交易のルートに関連し、壁の異例の高さは、防御したい社会経済活動の規模を想定させる。

だが、単一民族が一気に築いたのではなく、数百年にわたってナベ族、クランゴ族など複数の民族が改築と再利用を重ねてきたことが明らかになっている。

ガン族が18世紀に移住してきた頃にはすでに見放され、ガン族は居住に利用したが、まもなく王が病死したため、彼らは不吉な場所として近づけなくなった。そうした畏怖と辺鄙さが、遺跡を破壊や略奪から守ったといえる。



直角に曲がる壁。植物に侵食されている。



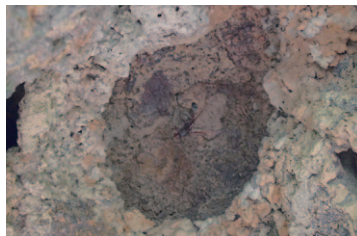
壁の断面。壁の厚みや石積みの仕組みがよくわかる。



ラテライトは熱帯地方に多く、風化のなかで鉄やアルミなど金属元素の水酸化物が粒子間に入ることができる。西アフリカの赤い大地の色の根源である。語源はラテン語の"later【煉瓦】"。石は不規則な形ながらほぼサイズが揃えられている。ロロペニ遺跡の壁はアフリカ的な煉瓦積みめの原型といえる。

遺産登録は2009年。世界遺産といえば、観光地としてさまざまな施設があるが、ここは小さな守衛小屋と看板、説明もない略図が一枚ずつあるだけだった。訪問者も他にいなかった。(2011年当時)

のちに保全活動も強化され、2017年4月には、ロロペニ遺跡の近くで、「フランス語圏アフリカ青年の世界遺産フォーラム」がブルキナファソ政府とユネスコの共催で開催された。



土が残る壁の凹みで、ハチが巣をつくっていた。

石の凹凸が激しいと上りやすいが、かつては分厚く土が塗られていた。今ではところどころ土が残るだけだ。

オビレ村のガン族の家の壁に、同じく土を塗ったラテライトの石積みが見られた。技術が伝承されているといえる。

石と石をつなぐ土にはシアバターも混ぜたという。西アフリカ産のシアバターは食用や薬用、美容で有名だが、ねばねばした残滓は、今でも壁の割れ目や屋根の防水にも使われる。

運搬と交換 (ガウGaouaの市場で)

ガウからN11号線でロロペニに向う途中、大きな荷物を頭上運搬する女・子供たちの行列に出会う。行列はとても長蛇で、地平線まで果てしなく続く。ガウで日曜日市が立つので、各集落から物資を運ぶのである。西アフリカの紅い道は歩く道だ。歩いて運ぶことが人々の生活世界全体を支えている。



ガウの日曜市は、近隣の村々からもたくさんの人々がやってきて、通常とはちがって奥の丘の方にも市場が広がる。仕切りもなく、思い思いに地面にモノを並べたり、小屋を巧みに仮設する。自由に伸び縮みし、柔軟に生成・移動する空間はすばらしい。



ラテライト石を寄せ集めて柱を立てている。コンクリートブロックがないのはいいことだ。



日曜市では誰がどこで何を売ってもいいと聞いたので、即興的に大統領の似顔絵を色鉛筆で描き、店を手づくりして破格で売ることを試みた。黒山の人だかりになり、さまざまな情報交換ができた。2014年11月、そのコンパオレ大統領の27年間に及ぶ長期政権は、反政府デモで倒された。

カセナの土の家 (ティエベレ Tiébéléとタンガソゴ Tangassogo)

ガワからワガドゥグに戻り、N5号線を南下、ガーナとの国境に近いポー Pôという町の少し東に、カセナ Kassena 族が住むティエベレ Tiébélé村がある。土壁を彩る美しい幾何学模様様の壁画で知られる。

16世紀にこの地に移住してきたカセナ族は、父系の血縁集団ごとに屋敷地 songoに住む。各ソゴは、土塙や土壁で有機的につながった複数の建物群からなり、全体は砦のように囲い込まれている。とりわけ首長のソゴは、フランス語で「宮廷 Palais」と呼ばれるだけあって規模が大きく(1.2ha)、壁画も壮麗である。



家を建てるのは男性、壁画を描くのは女性である。

建物は基本的に4種類。

矩形的家=マンゴロ

mangolo。主に若い夫婦が住む。陸屋根。

8の字型の家=ディニヤ di-

nia。「母の家」とも呼び、祖先の霊を祀り、年配の女性と子どもたちが住む。炊事場デュ di-yuu 布設。陸屋根。

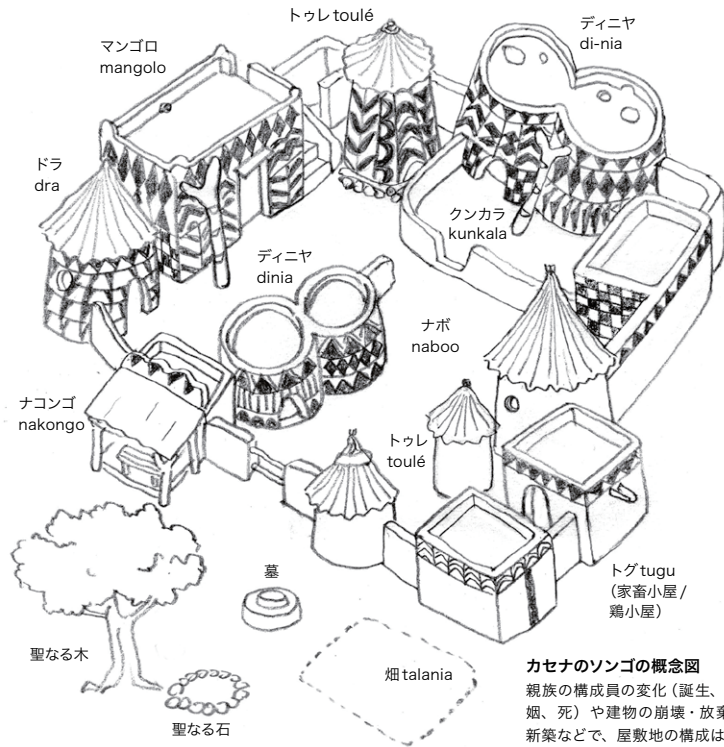
円筒型の家=ドラ dra。主に独身男性用。年配の男性や古い師が住むこともある。茅葺き屋根。

穀物庫=トゥレ toulé。穀物を貯蔵する倉庫。屋根は茅葺き。複数あるが、第一穀物庫は儀礼にも使われる。ほかに鶏や家畜の小屋など。

オープンスペースとして、中庭(ナボ naboo)、塙で囲まれた庭(クンカラ kunkala)がある。

通常のソゴは、出入口は一つで小さく、南か西向きである。門はつかない。

訪れた首長の屋敷の入口の前には、聖なる木(イチジク)が繁り、新生児の胎盤を埋めた小山(プロウ pourrou)、裁きや占いを行う小屋(ナコンゴ nakongo)、祖先の墓、聖なる石群などがあった。



カセナのソゴの概念図

親族の構成員の変化(誕生、婚姻、死)や建物の崩壊・放棄・新築などで、屋敷地の構成は固定的でなく、つねに変化している。



首長の屋敷の入口。入るにはガイドが必要。



屋敷地の路地は迷路状に連なっている。

壁づくりは、伝統的には土に牛糞と草を捏ねた練り土を、約30cmずつ、乾かしながら一日に4~5層積んでいく。穀物庫以外は基礎がないものが多いが、近年は、石で基礎を組んで日干しレンガを積む方法も普及しつつある。



壁の割れ目を通して練り土積みの様相と上塗りの厚み(約1cm)がわかる。

ユニークなのは、マンゴロもディニヤも、陸屋根であることだ。

屋根は柱に梁を載せ、その上にたくさんの枝を並べ、土を載せて叩き固めてつくる。したがって屋根は壁から構造的に独立している。ロビの住居とも共通する点である。

梯子や階段で上る屋根テラスは、もう一つの居住空間であり、モノを乾かす場としてだけでなく、暑さをしのぐ眠りのスペースとして使われる。

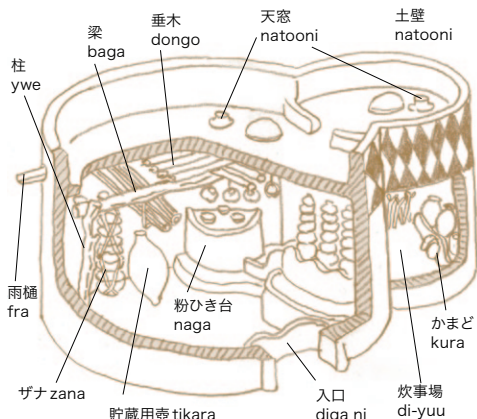


左が第一穀物庫。右は母の家(ディニヤ)。入口は約80cm。風雨と動物対策のため、入ってすぐに低い壁がある。



ディニヤの中にも壁画が描いてある。右は粉ひき台と石の用具。磨いたヒョウタンの大鉢が壁に吊られている。

8の字型の家(ディニヤ+ディユ)の概念図





屋根が落ちて、レンガ積みと目地の分厚さがわかる。崩れた家や塀も多い。生成と崩壊が共存している。



この矩形的家には母親と子供たちが住んでいた。近年は伝統も変容し、8の字型の家は減ったという。

雨が少ない地域とはいえ、土の家は恒久的でなく、数年も建てば崩れてしまう。だがまたその土を再利用して新築される。自然素材の循環を軸に、つくることと壊れることが対立せず、手づくりと日常の暮らしが地続きに連動している。



方法は、描く／浮き彫りにする／線刻するの3種類。ときにそれらが組み合わせられる。

壁の装飾

伝統的には、毎年、雨期に入る前の3～5月頃、女性たちによって集団的に行われる。最年長の女性が作業をリードするが、他の女性たちも積極的に材料準備や壁の表面の整えを進める。この作業は、さまざまな世代の女性たちが出会い、知恵や技術を交換し合い、カセナの文化を継承していく場でもある。

色は黒、白、赤の3色。黒はグラファイト (kandoè zon) で、近年はタールを用いる場合もある。白はカオリン (kandoè pongo)、赤はラテライトや赤土 (songo)。伝統的な壁画は赤地に、新しい壁画は白(灰色)地に描かれる。モチーフは、生活に関わる器や太鼓などの道具、動植物を幾何学的に単純化・記号化したものが多い。



より具象的に描かれた亀やモロコシ、トカゲなども散見される。

壁画の描き方の詳細は、現地で壁塗りを実習した前田菜月の報告を参照：
「ティエベレの壁塗りのレシピ」
https://www.chikyu.ac.jp/publicity/publications/others/img/kazehitotsuchi_essay2_0320.pdf

主な装飾紋様



さまざまな紋様があるなかで、屋根テラスからの水の流路を黒く塗ったものに心魅かれた。塗装が防水効果も持つことを示しているが、同時に他の図像的な装飾とは次元の異なるユニークな効果をあげている。



後日、日本画の秋野不矩先生(1908-2001)も、最晩年にティエベレ村を訪問されていたことを知った。秋野先生も西アフリカの大地の色に魅かれておられたという。



屋根テラスの排水孔も雨樋も「フラfra」という。雨樋のある家もあれば、孔から直接排水する家もある。

伝統的な工法による建築も壁画も、コミュニティの変容と新しい工業的材料の流入により、近年継承がしだいに困難になっている。案内してくれたガイドの青年は、「自分は家を建てるときはコンクリートブロックを使う、その方が手っ取り早いから」と言った。



タンガソゴ Tangassogo 2011/9/9

土素材の耐久性を高めるため、牛糞(nabéo)が用いられる。植物繊維が混じっており、壁画にも用いられる。さらに燃料や肥料にもなる牛糞は、西アフリカの物質文化の基礎資源の一つである。

ティエベレから南に12kmほど離れた同じカセナ族のタンガソゴTangassogoでは、中庭いっばいに大量の牛糞が広げられていた。草と混ぜて、材料化している途中だった。

タンガソゴでは、壁画が色褪せている家も多かったが、下地を白塗りの新しい壁画も見られた。外からの支援によると思われる。

タンガソゴ Tangassogo



タンガソゴ Tangassogo



壁面の黒色に使うグラファイト（石墨）は、水中で砕いてボール状（直径約15cm）に固めたものを売っている。泊まったティエベレの宿坊の片隅に山積みになっていて、主人から一つ分けてもらった。顔料として用いるには大粒すぎて、さらにすりつぶす必要がある。



石墨の球。宿坊のAuberge Kunkolloにて。



ラテライト粉のベッドが同じ宿坊の別棟にあった。

ビニールなどの工業製品の流入は、自然に還らないゴミを増やし、村の環境を悪化させている。そんななか、ティエベレ村の女性たちは、黒いビニールの買物袋を捕足裂いて、かぎ針編みで肩掛バッグをつくっている。カセナは女性の創造性が際立っている。



黒いビニールの買物袋を裂いて肩掛バッグを編む。



ラテライトを水で溶いて絵具として使ってみた。

民族が異なれば、同じ土も異なる使われ方をする。ワガドゥグに近いバルクイ Balkuy という村のはずれでは、日干レンガ積みみの小さなモスクが手づくりされており、中が収穫物の仕分けの作業に使われていた。建物の壁の組成もカセナ族とは異なるものだった。



ミフラブ（聖籠）があることでモスクとわかる。



カセナ族とは異なる草編みの穀物庫。右はモスクの壁。

アフリカの土の造形に接していると、大地がそのまま画材であることが感じとれる。芸術は大地から生まれ、大地に還る。



2011/9/10



ワガドゥグへ戻る途中で、干上がった赤い河原に降りたち、運転手らといっしょに大地を削って顔料の元を入手した。警察官が注意しに来たが、理由を説明して、いっしょに作業した。